

地球環境学堂

I	研究水準	研究 15-2
II	質の向上度	研究 15-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、新しい地球環境学体系化への道を示す『地球環境学のすすめ』の出版、新しい地球環境学の体系化を指向する三才学林懇話会の毎月開催、地域社会に学堂研究の成果を還元する「はんなり京都・嶋臺塾」の開催、国際的研究活動としての「京都大学国際シンポジウム：人間の安全保障のための地球環境学」開催、ベトナムにおける学堂の教育研究拠点の設置、海外との学術交流協定の締結（10件）、英文学術誌『SANSAI』の編集・刊行、学堂の年報「地球環境学堂・学舎・三才学林」の毎年発行のほか、平成16年度から平成18年度の3年間において著作及び論文数がそれぞれ97件及び665件に達しているなど、研究活動を積極的に展開している。研究資金の獲得状況については、平成16年度から平成18年度の期間、科学研究費補助金は年とともに増加し平成19年度実績で約2億5,000万円、受託研究費は約8,000万円となっているほか、寄附講座の設置による「森川里海連環学」の充実、科学技術振興調整費「サステイナビリティ学連携研究機構」の重点分担を実施するなどの活発な研究活動が展開されていることなどは、優れた成果である。

特に、『地球環境学のすすめ』の出版、三才学林懇話会の毎月開催、「京都大学国際シンポジウム：人間の安全保障のための地球環境学」開催、ベトナムにおける学堂の教育研究拠点の設置、海外との学術交流協定の締結（10件）、『SANSAI』の編集・刊行、学堂の年報「地球環境学堂・学舎・三才学林」の毎年発行、著作及び論文数、研究資金獲得等の研究活動が極めて高い水準で実施され、特筆すべき状況にあるという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、地球環境学堂の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、地球環境学堂が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、環境問題解決法や環境問題回避のための基礎研究等の分野で先駆的な成果が数多く生まれている。卓越した研究成果として、例えば、広域分布型流出予測システムの開発とダム群治水効果の評価に関する研究、酸素発生型光合成系での新規色素の機能に関する研究等があり、国際的に高い評価を受けている。社会、経済、文化面では、環境問題解決のための具体的な解決法に関する研究分野において、リブフレーム構造体に関する研究や青果物産地のための市場動向分析システムに関する研究等で社会的貢献度の高い優れた研究成果を上げている。これらの状況などは、優れた成果である。

特に、卓越したあるいは優秀な水準にあると評価された研究業績である広域分布型流出予測システムの開発と利用に関する研究等は極めて高い水準にあり、特筆すべき状況にあるという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、地球環境学堂の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、地球環境学堂が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。